

〈レビュー論文〉

イギリス植民地期ミャンマー経済史の課題

—デルタの稲作経済史を中心に—

水 野 明日香*

How and What Should We Ask about Myanmar Economic History during the British Colonial Period?

Asuka Mizuno

Abstract

The purpose of this paper is to explore how and what should we ask about Burmese economic history during the British colonial period, especially about delta region, through reviewing some representative studies from one by Furnivall to recent works on colonial history. At one time, it was popular theme to study rice economy in the Burma delta where the largest rice export area in the world from the late 19th century to early 20th century, but it became some classical theme in recent years and younger generation seldom chose this topic. What is the meaning to study this theme now?

本稿の目的は、イギリス植民時代のミャンマー史に関して、近年発表されたいくつかの重要な研究を取り上げ、その動向を確認し、今日ミャンマー経済史研究、とりわけデルタの稲作経済史研究を行う際の視点と課題を探ることである。イギリス植民地支配下の19世紀に世界最大の米輸出地帯に変容したデルタの稲作経済の研究は、かつては花形であったが、現在はいくぶん古めかしいテーマになり、選ばれることも少なくなっている [Montesano 2009: 417]。今日、デルタの稲作経済史について、明らかにすべき課題は何であり、それにはどのような意義があるのだろうか。

1. ファーニバルの問題提起

1.1 ビルマ政治経済学入門

植民地時代のイラワジ・デルタに関する社会経済史研究の出発点は、今日でもファーニバルによる研究である。東南アジア研究の泰斗ファーニバルは、1878年にイングランドのエセックスで生

* 亜細亜大学経済学部准教授

まれ、ケンブリッジ大学を卒業後、1902年に24歳でインド高等文官（Indian Civil Service：以下ICS）としてマレー半島の付け根に位置するモールメン（Moulmein、現モーラミヤイン）に赴任した。以降、いち早く出世し、上ビルマや下ビルマで県知事や地租査定官を歴任、1923年には45歳の若さでICSを早期退職すると、読書クラブ（Burma Book Club）の創設や *World of Books* という雑誌の創刊などビルマの若者の啓蒙活動に努めた [Trager 1963: 1]。

ファーンニバルの著書は多数あるが、ミャンマーで最も参照されるのは、世界恐慌の最中の1931年に初版が出版された『ビルマ政治経済学入門』（*An Introduction to Political Economy of Burma*）である。王朝時代以来のビルマ族の中心地であった上ビルマの社会と対比しながら、新開地の下ビルマ・デルタの発展の跛行性を描いたこの本は、インドから分離して間もない1937年、政治的混乱の末ネーウィン暫定政権が誕生した1957年とミャンマー史の大きな節目ごとに版を重ね、読み継がれてきた。またラングーン大学では長らく、ビルマ経済のテキストとして使用されていた [Taylor 1995: 50]。

『ビルマ政治経済学入門』は、デルタの開発過程を以下のように記述している。スエズ運河の開通によりヨーロッパ市場への道が開かれると、上ビルマからの移民は開墾のための資金を借り入れに依存しながら、急速にイラワジ・デルタを開墾した。しかし慣れない環境での自然災害や隣人との境界トラブルなどのために、人々は借金を返済できず、土地を失った。イラワジ・デルタは世界最大の米の輸出地帯となったにもかかわらず、ビルマ人農民は窮乏化していった。一方で、米輸出に関わる近代的な職業を占めたヨーロッパ人やヨーロッパ人と現地人の間で仲介役を果たした印僑・華僑は、繁栄を享受した [Furnivall 1957: k-m, 43, 57-58]。

ファーンニバルは英領下の下ビルマで形成された社会を複合社会（plural society）と名付けた¹⁾。複合社会とは、複数のエスニック・グループが、並存しながらもバラバラに暮らし、共通の福祉や共通の目的のために団結することなく、個人の利益のみを追求する分断された社会であった。図式的に述べると、ピラミッドの頂点に君臨する都市部の近代的な職業は少数のヨーロッパ人が占め、大多数のビルマ人は農村部の最下層の伝統的な職業に従事し、大量に移入した印僑や華僑が近代的部門と伝統的部門の中間で両者をつなぐ仲介者の役割を果たすという構図である。各エスニック・グループは、官僚、商人、労働者など経済的役割に応じてさらに複数のサブ・グループに分かれており、各々はビジネス以外では互いに全く関わることをしない生活をしていた [Furnivall 1957: k]。

複合社会の問題点は、西洋の資本主義国よりもはるかに競争的で無制限な利益の追求がみられたことであった。ファーンニバルによれば、典型的な資本主義国のイギリスやアメリカのような西洋では、一般的に認識されるよりはるかに、企業の利益追求行動は社会的に制約されているし、社会的な制約が十分に機能しない場合には法によって制約される。しかしビルマのような複合社会では、共通の社会的利益がなく、私企業の反社会的傾向を制限する社会常識も存在しなかったからである。ビルマでは競争原理の圧力の下で、社会的価値は排除され、慣習に基づく社会秩序は経済的利害関係に置き換えられた。下ビルマの治安の悪さ、犯罪率の高さは他の英領地域と比べても悪名高かつ

た [Furnivall 1957: am, 67]。

このような複合社会は、外界に対して抵抗力の弱い 19 世紀の自存的伝統社会が、資本主義世界にさらされた結果、生じた社会として提唱された概念であった²⁾。例えばファーニバルは、複合社会が形成された原因を次のように説明している。ビルマ人は外国貿易の経験がなかったので、産物をどこで、どのように売却すればよいのか分からず、そのため外国人が全ての貿易を取り仕切るようになった。またビルマでは近代的商工業は発達しておらず、ビルマ人は蒸気機関も機械も知らなかったため、経済機構全体が外国人によって形成され、運営されるようになった。またビルマ人は言語の壁によっても、新しい経済システムから排除された。そのためビルマの物質的資源は開発されたが、経済が発展すればするほど、ビルマ人は発展から取り残されていったとファーニバルは述べた [Furnivall 1957: j-k]。

ファーニバルは複合社会の発生とイギリスの植民地政策の関係について明示的には述べていない。しかしイギリスの植民地政策が、当初、政府は個人や企業の経済活動に干渉せず、諸所の調整をもっぱら市場の原理に委ねるレッセ・フェール (*laissez-faire*) であったことを強く非難している [Furnivall 1957: q]。おそらくファーニバルにとっては、レッセ・フェールゆえに近代的な経済活動に不慣れなビルマ人を保護しなかったことは政策として不適切であった。

1.2 ファーニバル以降のデルタ史研究

ファーニバル以降の研究の重要な課題は、彼が提示した「複合社会」を乗り越え、輸出経済へのビルマ人の適応を描くことであった。これを成し遂げ、研究の水準を飛躍的に高めたのは、1968 年に出版されたチェンの *The Rice Industry of Burma, 1852-1940* と 1974 年に出版されたアダスの *The Burma Delta, Economic Development and Social Change on an Asian Rice Frontier, 1852-1941* である。地租査定報告書や各種のレポート等の大量の公刊資料を駆使した二人の研究は、現在でもデルタ研究のスタンダード・ワークであり、アダスの書籍は 2011 年に、チェンの書籍は 2012 年にそれぞれ再版された。

デルタの稲作産業を田植えから輸出まで解明したチェンは、農村部の穀の取引など商業活動にビルマ人も従事し、20 世紀初頭以降は内陸部で小規模な精米所の経営にも乗り出したことを明らかにした [Cheng 1968: 50-53, 82-88]。小規模ながらも商工業に現地人も従事したことは、他の東南アジアと比べてビルマの大きな特徴であった³⁾。

より明確に複合社会論の修正を意識したのはアダスである。アダスはそれまで均質に書かれてきたデルタの開発史に、時代性、地域差、農村内部の階層差といった視点を取り入れることにより、開発の初期の時代の数十年の健全かつ急速な発展とビルマ人もこれに積極的に反応したことを示した。その上で複合社会のピラミッド構造を否定し、頂点はヨーロッパ人が占めていたが、中位の位置はアジア系移民とビルマ人が分け合っていたこと、また地主、小作人といった農民各階層は流動的であり、上昇も容易な社会であったことを明らかにした [Adas 1974: 103-123]。

しかしアダスも20世紀初頭以降については、従来の説を踏襲している。すなわちデルタのフロンティアが消失し、成長が鈍化すると状況は一転し、調和的な複合社会は、闘争と不安の時代に突入、階層間の流動性も失われたという説である。特に世界恐慌以降は、通常であれば社会的緊張や階層間の分断として現れる紛争が、複合社会ゆえに民族間対立として問題が表面化したとした[Adas 1974: 127-153]。

現在、植民地時代の稲作経済に関して引用される文献は、チェンとアダスの研究であり、植民地時代の入り口ではビルマ人も輸出経済に積極的に対応したことや物質的な豊かさを享受したことはもはや定説となっている。その一方で、ファーニバルが提示した、土地を喪失し、貧窮化したビルマ人農民という植民地時代の全体像は現在も維持されている⁴⁾。その理由として考えられるのは、第一にファーニバルは独立を担ったナショナリスト・グループの現状認識に多大な影響を及ぼしたからである。彼らは経済をビルマ人の手に取り戻して複合社会を解消するため、独立後には農地の国有化やコメ輸出の政府独占など社会主義的な路線を選択したとされている[Brown 2013: 96-101; Myat Thein 2004: 14-16]⁵⁾。このような歴史認識はミャンマーの正史であり、ビルマ式社会主義を進めたネーウィン軍政の正統性のよりどころになっている[Houtman 2007]。

ファーニバルの説が根強く残っている第二の理由は、ファーニバルの説の魅力である。彼が提唱した複合社会は、民族によって分断された社会を分析する概念として、東南アジアを超えて世界各地で、人類学者や社会学者にも未だに用いられている[Lee Hock Guan 2009: 36-37]。それでも近年は、ファーニバルの学説の検討やミャンマー史の見直しも始まっている。

2. ミャンマー史の歴史叙述研究

近年の南アジア・東南アジア史研究では、歴史を記述する際に用いられる概念や行政文書で使用されるカテゴリーを再検討し、歴史認識を規定する枠組みや歴史記述そのものを問い直すヒストリオグラフィ研究が盛んに行われている⁶⁾。ここでは本論との関りで特に重要な、ミャンマー史に関する二つのヒストリオグラフィ研究を取り上げる。

2.1 ファーニバル研究

今日、植民地時代のビルマ史研究を行うにあたって踏まえるべき研究は、パム(Julie Pham)によるファーニバル研究である。パムは、ファーニバルが、公にはしていなかったが、イギリスの社会民主主義、フェビアン協会の長らくの会員であったことを明らかにし、複合社会というアイディアは必ずしも現地社会の観察から直接導かれたものではなく、フェビアニズムの影響を強く受けたものであることを示した。パムによれば、ファーニバルの複合社会には、フェビアン協会が重視する「健全で健康な」コミュニティー、社会は有機的な組織体であるという考え方がよく表れている。またファーニバルが複合社会の形成要因としたイギリスのレッセ・フェール政策の批判は、フェビ

アン協会の中心的テーマであった [Pham 2005: 325-330]⁷⁾。

フェビアンの考えは、大衆を「正しく」導くため、コミュニティの擁護者としてのエリートの役割を認めた点で、ICSと親和性が高く、ファニーバルの他にも親ビルマ的として著名な複数のICSがフェビアン協会の会員であった。パムによれば、彼らは、ビルマの近代化のために奮闘すると同時に、ビルマの伝統を保存しようとする家父長的な心性を持ち、それはすでに失われたエキゾチックな文化を求めるという意味で「帝国主義者のノスタルジア」、「亡霊狩り」と称されるものであった [Pham 2004: 247-249]。

こうしたパムの主張の含意は、複合社会という概念が、「民族」によって現地社会を分断して理解し、これを統治に利用するコロニアリズムを内包していることであった [Pham 2004: 268]。東南アジア政治を専門とするリー・ホック・グアン (Lee Hock Guan) も、複合社会論が独立後の政治エリートによって権威主義体制の正当化に利用されたことや現実の社会にとっては逆効果であり、民族間の関係を悪化させた」と指摘している [Lee Hock Guan 2009: 39-40]。

パムのコロニアリズムに関する主張は、ダークス (Nicholas Dirks) の研究から示唆を得ている [Pham 2004: 268]。ダークスによれば、インドにおけるカースト概念は、イギリス植民地支配下において、元々存在したのとは全く異なる形に「創造」し直され、次第にイギリスの植民地統治を正当化するために政治問題化された。ダークスによれば、植民地支配の正当性の根源は、植民地社会に対する知識であった [Dirks 2001]。これに倣えば「複合社会」という概念も、フェビアン協会や植民地官僚にとって、社会問題を作り出し、自らの存在を正当化するための装置であったと言える。「複合社会」が分割統治のための概念装置であったとすれば、経済史研究に及ぼした問題点は、民族問題に過度に焦点を当てることにより、階層への視点を失わせたことである。

2.2 サヤー・サン反乱再考

植民地統治者の認識の枠組みや植民地行政文書のカテゴリー分析は、インド史研究において先行しており、人類学者のバーナード・コーン (Bernard Cohn) を始めとして、これまで歴史の表舞台に立ってこなかった従属民に光を当てたサバルタン研究やテキスト批判で知られるラナジット・グハ (Ranajit Guha)、パルタ・チャタジー (Partha Chatterjee) らによる多くの研究がある。特に、1855年にベンガル東部で発生したサンタールの反乱に関するグハの研究は、ミャンマー史研究にとっても参考になる。グハによれば、経済的に取り残された指定部族が、地主や金貸しに対して起こした反乱とされているサンタールの反乱は、宗教的意識こそが反乱の核心的原因であった。経済が原因とされたのは、イギリスの支配の失敗により反乱が起きたと解釈し、その改善によって統治の正統性を確保したいイギリスの植民地官僚の政策立案という目的のためであった [竹中 1998: 25-68]。

ミャンマー史においても、このような成果を踏まえた研究が行われ始めている。マイトリー・アウントゥイン (Maitrii Aung-Thwin) は、サヤー・サン反乱として知られる 1930 年にビルマ全土で

発生した農民反乱の語り (narrative) を再検討した。アウントゥインは、農民反乱に関する植民地行政の調査報告書は、経済発展や近代化に取り残されたビルマ人農民 (Burmese peasant) と都市部の近代的なエリートという二項対立の枠組みの中で作成され、この調査報告書を利用したその後の研究もこの二項対立を引き継ぎ続けてきたことを明らかにした。サヤー・サンは、逮捕・起訴され、反乱を起こした背景や動機が語られる過程で、絶え間なく反乱が起こり、定期的に王座に就こうとする者が現れるという非常に特殊なビルマ史観の中に位置づけられ、前近代的なビルマの性質の体現者という役割が付与されたのであった。サヤー・サンの前近代性を表す重要なエピソードとして有名な、反乱を起こす直前に即位式を行い「ビルマ王」に即位したという話も噂に過ぎなかった [Aung-Thwin 2011: 128-129]。

一方で、反乱に加わった農民は、都市部で導入されている近代的な政治機構に参加する能力が欠如しており、植民地国家によってもたらされた技術発展や進歩を理解することができない人々であると見なされた。しかし実際には、農村部の住民も都市部の政治組織に組み入れられており、その政治状況は地域により多様かつ複雑であった [Aung-Thwin 2011: 130-132]⁸⁾。

アウントゥインの指摘で経済史研究にとって重要な点は、農民反乱の原因はもっぱら政治的なものであり、経済ではなかったというものである⁹⁾。経済的理由を重視したのは、イギリス人歴史家が描いたビルマ史を修正し、1930年代の同胞の努力を正当化したいビルマ人歴史家であったという。ビルマ人歴史家の狙いは、サヤー・サン反乱の経済的動機に焦点を当て、反乱における農民の役割に注目し、独立後の社会主義路線を正当化することであった [Aung-Thwin 2011: 144-146, 166, 173]。

アウントゥインがそのようなビルマ人歴史家として取り上げたのはマウンマウン博士である。マウンマウン博士は、ネーウィンのお抱え歴史家として有名であり、彼だけが国軍文書館の史料へのアクセスを許されるという特権を利用し、アウンサンはビルマを専制的な社会主義国家にしようとしていたという歴史を作りあげた。そしてまた、ビルマ式社会主義への道を進めるネーウィン、その後継者に位置づけようとした [Houtman 2007]。

つまり植民地時代の経済史は、独立後の社会主義が必然となるように解釈されてきたと言える。また英領時代の土地を喪失し、貧窮化するビルマ人農民像が維持され続ける背景には、1930年代には農民反乱が発生したという事実が動かしがたく存在していることもあるが、その発生原因について、最近の研究ではこれまでの説が崩されつつあることを確認しておきたい。さらにアウントゥインが、前近代的で無知蒙昧なビルマ人農民 (Burmese peasant) というコンセプトが植民地の行政文書の中で創られたものであると明らかにしたことも重要な貢献である。これを踏まえた上で残されている今後の課題は、ビルマ人農民とは一体どのような存在であったのかを明らかにすることであろう。

3. 広がるトピック

3.1 植民地時代をどう描くか

これまでのイギリス植民地時代に関するミャンマー史研究は、デルタの農村部の社会経済的変化が中心的なテーマであったが、近年ではジェンダー、都市史、汚職などの社会史へとトピックが広がっている。これらの研究が示唆する点は多岐にわたるが、デルタの稲作経済史にとって重要な点を整理すれば、1つは民族間の分業・分断という意味での単純な「複合社会」は実証的に否定されつつあるという点である。イケヤはジェンダーの視点からコロニアリズムやビルマにおける近代を検討し、英領時にビルマ人女性と外国人男性の婚姻が多くみられ、「混血」人口が増加したことを明らかにした [Ikeya 2011: 120-142]。また、東南アジア研究の中で華人研究が最も遅れたミャンマーであるが、2017年には待望の成果が公刊された。著者は、個人のライフヒストリーやデルタにおける建築物の追跡から、ファーニバルが述べたのとは真逆に、華人は現地社会と相互に交流、作用していたと述べている [Li 2017]。

在地社会と外来の要素を二分法ではなく、相互作用として捉える視点は、植民地国家や植民地時代の描き方にも適用されている。当時から有名であったビルマにおける下級役人による汚職と職権乱用を切り口として、人々の日常生活から植民地国家を捉えなおしたサー (Jonathan Saha) は、植民地国家はこれまで言われてきたほど堅固に官僚的、合理的存在ではなく、無定形かつ曖昧であったとする。また汚職や職権乱用とみなされた行為は、形式化された植民地国家と表裏一体の関係で創り出されたものであり、植民地国家は単純に異質な存在 (alien entity) ではなく、ビルマ社会の中から生み出されたものとみなさなければならないと主張する。その意味で、植民地時代を異質な時代として捉え、独立後の経済成長や民主主義の失敗の原因としか見なさない見方には限界があるとする [Saha 2013: 1-2, 14-15]。このような指摘を、経済史研究は特に重く受け止める必要がある。

都市における移民統制を検討し、英領インドの1州であったビルマにおいて「国境」が生成し、実体化する過程を明らかにした長田も、植民地行政の日常的実践が暮らしに及ぼした影響を考察した点で、サーと視角を共有している。長田は、既存の都市研究が、1930年代の人種主義的暴力の発生の背景をアダスの社会経済史研究に依拠していることを批、暴力を発生させた都市内部の構造的要因を解明することによってアダスの説を乗り越えることを試みているが [長田 2016: 12-14, 135-136]、社会経済史研究の立場からのアダス説の更新も重要であろう。

3.2 計量体格史 (anthropometric history)

以上で見てきたように、近年では従来のミャンマー経済史像をがらりと変え得る研究が相次いで発表されている。とはいえ、これまでの植民地時代像が完全に書き換えられることも考えにくい。

英領時代に米の輸出基地として開発されたビルマが豊かになったか否かという問題は、近年では伝染病や体格の時系列的变化を扱う計量体格史と呼ばれる手法によっても検討されている¹⁰⁾。アジア諸地域の生活水準の推計で著名なバッシーノは、植民地行政による身体測定または人類学調査による数値を利用して、英領下のビルマにおける身体的な福祉の変化の推計を行った。バッシーノによれば、1860年代初頭に下ビルマで生まれた成人男性の身長中央値は162.7cmであったが、1880年代生まれの者は160.5cmに、1920年代と1930年代に生れた者は157.0cmから158.0cmまでに縮小した[Bassino and Coclanis 2008: 220-224]。

身長が縮小した原因は、デルタが稲の商業的単作地帯となったことによる栄養摂取の低下やマラリアなどの感染症の増加が原因であった。一方で、自給的な生活を維持した上ビルマでは、そのような現象は見られなかった。下ビルマの一人当たり所得は上ビルマよりも高く、人々は自ら進んで開墾に従事したとはいえ、生物的な代償を伴っていた。それゆえにバッシーノとコクラニス¹¹⁾はデルタの「経済発展」(economic development)と呼ぶより、「経済的転換」(economic transformation)と呼ぶ方が適切であると主張している[Bassino and Coclanis 2008: 213, 225]。このような研究結果は、農民が貧窮化したとするファーンニバルのような同時代人の観察を支持するものである。

むすびにかえて

以上の動向を踏まえ、植民地時代のデルタの経済史について、何が課題となり得るだろうか。植民地時代の歴史認識の枠組みが問い直されている今、必要なことは、下ビルマ・デルタでビルマ人農民が農地を喪失したとされる現象について、その根拠として使われている植民地行政文書の中のカテゴリーや解釈の枠組みを再検証することである。その上で、貧窮化する農民像が否定されるのであれば、独立後のビルマ式社会主義路線はどのように準備されたのかを明らかにすることである。

このような研究を行うことの意義は、未だにビルマの政治家を縛りつづける植民地時代の経験という呪縛からの解放である。歴史的視点から現在のミャンマーに関する著書を多数執筆している歴史家のタンミンウーは、軍政とアウンサンスーチーは、反植民地と自由市場への介入で一致していると見ている[Thant Myint-U 2020: 253]。

また現在のビルマは、剥き出しの資本主義や激しい競争が見られた植民地時代と似ているように見える。民族間分業という意味でのファーンニバルの複合社会は否定されたが、世界市場に包摂された際のローカルな社会の変化を扱おうとした問題意識は、グローバル化が進展し、急速に社会変化が進行する今、まだ現実性を持つように思われる。植民地時代の経験からビルマ的な経済発展の特徴を明らかにすることには意義がある。

【注】

- 1) ファーニバルが「複合社会」という言葉を初めて使用したのは、1939年に出版された *Netherlands India: a study of plural economy* であるが [斎藤 2008: 6-8]、ここでは、よりミャンマー史に即して書かれた *An Introduction to Political Economy of Burma* の第3版序章の記述から引用する。なお「複合社会」という概念は、同時代にビルマにも伝わっていた。
- 2) 特にテイラーはこの点を強調している [Taylor 1995: 51-52]。
- 3) 例えば英領マラヤでは、マレー人農民が生産するゴムの集荷にあたったのはもっぱら華人商人であり、彼らは全国津々浦々の農村に深く入り込み、輸出用一次産品の集荷とその対価としての各種消費財の配給を行っていた [加納 2012: 85]。
- 4) 例えば、[Brown 2013: 205]。
- 5) ファーニバルは、分断されたバラバラの複合社会を統合する手段としてナショナリズムに期待したとされている [Pham 2004: 244-245]。
- 6) 東南アジアの歴史叙述を扱った研究としては、例えば [小泉 2006; 小泉 2018; Aung-Thwin 2011] を参照。
- 7) 複合社会論がイギリスの労働党やフェビアン植民地局 (Fabian Colonial Bureau) の議論で果たした役割については、[峰 2009: 247] を参照。
- 8) ビルマでは 1920 年代には、政治僧と呼ばれる人たちがウンターヌ・アティン (*wunthanu athins*、愛国組織) を結成し、全国津々浦々の農村に支部を置いていた。このネットワークと初期の民族的反英組織である GCBA (General Council of Burmese Association) が結びつき、早くから農村部でも政治活動が展開していた。
- 9) 世界恐慌の影響は無視できず、このようなアウントゥインの見解も論点となり得るが、これまで反乱の原因を経済に求めすぎたことも確かである。アリシア・ターナーは、仏教徒の世界観が植民地国家の福祉や教育といった目標と調和しないものであったことを明らかにしている [Turner 2014]。
- 10) 計量体格史 (anthropometric history) とは、生物学や人類学の知見にもとづき 1930 年代に始まった分野であり、計量経済史と連携しながら生活水準論争とも結びつき、近年では世界各地に関して活発な研究が行われている [川越・脇村ら 2010: 134]。

参考文献

- Adas, Michael. 1974. *The Burma Delta: Economic Development and Social Change on an Asian Rice Frontier, 1852-1941*. Madison: University of Wisconsin Press.
- Aung-Thwin, Maitrii. 2011. *The Return of the Galon King*. Ohio: Ohio Uni. Press.
- Aung-Thwin, Michael Arthur and Hall, Kenneth R ed. 2011. *New Perspectives on the History and Historiography of Southeast Asia: Continuing Explorations*. London: Routledge.
- Bassino, Jean-Pascal and Coclanis, Peter A. 2008. 'Economic transformation and biological welfare in colonial Burma: Regional differentiation in the evolution of average height', *Economics and Human Biology*, Elsevier.
- Brown, Ian. 2013. *Burma's Economy in the Twentieth Century*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cheng Siok-Hwa. 1968. *The Rice Industry of Burma 1852-1940*. Kuala Lumpur: University of Malaya Press.
- Dirks, Nicholas. 2001. *Caste of Mind: Colonialism and the Making of Modern India*. Princeton: Princeton University Press.

- Furnivall, J. S. 1957. *An Introduction to the Political Economy of Burma*. Rangoon: Peoples' Literature Committee and House.
- Houtman, Gustaaf. 2007. "Aung San's *lan-zin*, the Blue Print and the Japanese Occupation of Burma", Nemoto, Kei ed., *Reconsidering the Japanese Military Occupation in Burma (1942-45)*. Tokyo: Tokyo University of Foreign Studies.
- Ikeya, Chie. 2011. *Refiguring Women, Colonialism, and Modernity in Burma*. University of Hawai'i Press: Honolulu.
- Lee Hock Guan. 2009. Furnivall's plural society and Leach's political system of highland Burma, *Institute of Southeast Asian Studies*, October 7.
- Li, Yi. 2017. *Chinese in Colonial Burma, A Migrant Community in a Multiethnic State*. Palgrave Macmillan.
- Montesano, Michael J. 2009. Revisiting the rice deltas and reconsidering modern Southeast Asia's economic history. *Journal of Southeast Asian Studies*, 40 (2), pp.417-429: The National University of Singapore.
- Myat Thein. 2004. *Economic Development of Myanmar*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- Pham, Julie. 2005. J. S. Furnivall and Fabianism: Reinterpreting the 'plural Society' in Burma, *Modern Asian Studies* 39, 2.
- . 2004. Ghost hunting in colonial Burma, Nostalgia, paternalism and the Thoughts of J. S. Furnivall. *South East Asia Research*, 12, 2.
- Saha, Jonathan. 2013. *Law, Disorder and the Colonial State, Corruption in Burma c.1900*. Palgrave Macmillan.
- Taylor, 1995. 'Disaster or release? J. S. Furnivall and the bankruptcy of Burma', *Modern Asian Studies*, 29, 1. 45-63.
- Than Myint-u. 2020. *The Hidden History of Burma: Race, capitalism, and the crisis of Democracy in the 21st century*: w. w. Norton & compang: New York.
- Trager, Frank N. ed. 1963. *Furnivall of Burma: An Annotated Bibliography of the Works of John S. Furnivall*. New Heaven: Yale University.
- Turner, Alicia. 2014. *Saving Buddhism, The Impermanence of Religion in Colonial Burma*. Honolulu : University of Hawai'i Press.
- 長田紀之 (2016)『胎動する国境 英領ビルマの移民問題と都市統治』山川出版社。
- 加納啓良 (2012)『東大講義 東南アジア近現代史』めこん。
- 川越修・脇村孝平・友部謙一・花島誠人 (2010)『ワークショップ 社会経済史』ナカニシヤ出版。
- 小泉順子 (2006)『歴史叙述とナショナリズム タイ近代史批判序説』東京大学出版会。
- (2018)『歴史の生成 叙述と沈黙のヒストリオグラフィ』京都大学学術出版会。
- 斎藤照子 (2008)『東南アジアの農村社会』(世界史リブレット) 山川出版社。
- 竹中千春訳。グハ、パーンデーら著 (1998)『サバルタンの歴史 インド史の脱構築』岩波書店。
- 峰陽一 (2009)「英領アフリカの脱植民地化とフェビアン植民地局」北川勝彦編著『脱植民地化とイギリス帝国』ミネルヴァ書房。